
SHUFFLE! ~ 帰って来た少年 ~

欠陥電気

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SHUFFLE！〜帰って来た少年〜

【Nコード】

N9557X

【作者名】

欠陥電気

【あらすじ】

島が三日月状の形をした島“初音島”

そして、一人の少年の物語が始まる・・・。

初作品初投稿なので駄文ですが、色々とアドバイスをくれると嬉しいです。

この小説は、SHUFFLEと、D・C・？のコラボ小説です。尚且、主人公が最強のオリ主です。そして、作者はSHUFFLEの原作をプレイしたことはありません。なので、キャラが違っていたり

しますがご了承下さい。(D・C・?はPS2版ならプレイします)

最強等が嫌いな方、コラボ小説が嫌いな方はバックして頂いても構いません。それでも良いと言う方は、どうぞご覧下さい。

プロローグ

島が三日月状の形をした島“初音島”

そこには、年中枯れない桜が存在した・・・

その桜は、枯れないと同時に願いを叶える桜の木でもあった・・・

そして、一人の魔法使いの女の子が居た・・・

その魔法使いはこう願った・・・

「ボクにも家族を下さい・・・。」

それと同時に、とある病室では少年が少女を救うために、ある一つの嘘をついた・・・

「お前の母親を殺したのは俺だ・・・。」

魔法使いの女の子は家族を手に入れ、少年はある出来事により姿を消した・・・

そこから物語の歯車が少しずつ動き出す・・・

ブローグ（後書き）

アドバイス等あったらよろしくお願いします。

主人公設定（幼少期）（前書き）

今回は、主人公の設定を書きます。

主人公設定（幼少期）

名前：神崎 光麻
かんざき ひろま

年齢：7歳

身長：義之と同じ位 体重37kg

性別：男

髪色：黒

見た目：若干女の子っぽい顔をしている。

性格：お人好しで、困っている人を放っておけない

魔力ランク：D（BB）

幼い頃は無意識に魔力を抑えている

目の色：両目とも黒

父親から剣術を習っており、剣の扱いはお手のものだそうだ

因みに、両親は結婚してもなお、ラブラブだそうだ（主人公談）

甘い食べ物が大好き。

イメージCV：高橋 美佳子

主人公設定（幼少期）（後書き）

厨二すぎるww

すみません、主人公の名前を変にして。

第一話（過去編）（前書き）

幼い頃の主人公が初音島に引っ越してきます

第一話（過去編）

「パパ、今度はどこに引つ越すの？」

「今度はな、お島が三日月の形をした大きな島に引つ越すんだよ」

「そうよ光ちゃん、とても大きな島だから、友達もたくさん出来るかもね」

「うん！僕とても楽しみだよ」

あ、自己紹介が遅れたね。僕の名前は神崎 光麻。7歳！

お父さんとお母さんの仕事の都合で前に居た町から、初音島に引つ越す事になって、今は初音島に向かつてる途中です」

「今度の学校でも友達が出来たら良いな」

物語の齒車はまだ回らない・・・

第一話（過去編）（後書き）

何かgdgdになりそうな気がしてきた（・・・）

アドバイス等よろしくお願いします。

第二話（過去編）

パパやママとお話をしていると

「まもなく初音島に到着します。お忘れ物の無いよう気を付けてください。」

船にあるスピーカーから定番の台詞が聞こえました。

「おーやつと初音島に着くぞ。」

「光ちゃん、忘れ物の無いようにしといてね。」

「はーい♪楽しみだなー♪」

♪船着き場にて♪

「おおー！ここが初音島かー！」

「驚くのは早いぞ光麻。この島には、一年中枯れない桜があったんだよ。」

「一年中！しかも枯れない桜って！スゴいね！まだあったりするの？」

「スゴいや！一年中枯れない桜なんて！まだあるなら、早く見たいな」
「そう思い、パパに聞いてみると」

「残念。何でも、桜はもう枯れちゃったみたいだぞ」

「ええ〜！・・・観てみたかったのに。」

「まあ光ちゃん、それはしょうがない事だと思うわ。ずっと枯れずに咲く桜なんて物は、無いと思うわよ。」

「うう・・・そうだね。枯れずに咲いてるなんて、あり得ないもんね。お花だって、いつかは枯れちゃうもんね。」

「そうよ光ちゃん。」

「パパ、ママ。早くお家に行こうよ」

荷物持って疲れたよ。そう思っていると

「よし！じゃあ、これから住むお家に行こうか！」

「うんー！」

第二話（過去編）（後書き）

誰か！誰か俺に文才を！．．．ああ、学校面倒だな

アドバイス等あったらよろしく願いしますね。

第三話（過去編）（前書き）

最近、学校に行くのが楽しいと思うときがある・・・何故だろうか？

第三話（過去編）

しばらく町を歩いていると、閑静な住宅街に着きました。

「もうちよつとでお家に着くわよ。家に着いたら荷物を置いて、ご近所の方に挨拶に行きましょう。」

「そうだな。これからお世話になるかも知れないからな。」

「近所に同年代の子が居れば良いな。」

住宅街を歩いていると、一軒の家が見えてきました。しかも・・・結構デカイ家です。

「ママ、此処が新しいお家？」

「そうよ。」

「へえ、かなりデカイね。」

どのくらいデカイかって言うそうですね、普通の一軒家と違って、見上げる位の大きさに、横幅も、かなりありますね・・・一体いくらするんだらう・・・この家

「何か・・・前に住んだお家よりも、レベル上がってない？」

因みに前に住んだ家は、普通の一軒家でした。

「そうかしら？前に住んでた家と、そう変わって無いと思うけど。」

「そうだな。この家も安い方だったからな。さて、一旦家に入って荷物を置こう。」

・・・案の定、家の中も広がったです。一階だけでも、部屋がいっぱいあるし、縁側もあるし、二階もあるし・・・絶対この家の値段高いな・・・いくらするのか気になり、僕はパパに聞いてみた。

「パパ。この家いくらするの？」

「んー確か、一千万位の安い値段だったと思うぞ。」

「高！一千万って・・・」

しかもその値段を安いと言い張る時点で、金銭感覚おかしいんじゃないの？って言いたくなる。

くしばらくして

「荷物も置いた事だし、ご近所さんに挨拶してきましょう。」

「そうだな。なら、早く行くか、行くぞ光麻。」

「はい、行こう行こう。」

第三話（過去編）（後書き）

俺に文才を下さい！

結構g d g dになりそうな気がしてきた。

第四話（過去編）（前書き）

やばい・・・ggggかな？

第四話（過去編）

「まずはお隣に住んでいる人達に挨拶に行きましょうか。」

「よし。そうと決まれば、早く行こうか。」

手土産（有名なイチゴタルト）を持って、隣の家に向かった。

隣の家の立て札を見ると、「芙蓉」という字が書いてあった・・・
何だか、恐い人にあるような名字だね。

「よし。早速押してみるか。」

パパがそう言って、呼び鈴を押した。

ピンポンという最早聞き慣れた音を聞きながら僕は、どんな人が
出てくるのかと、楽しみにしていました。

するとドアから、芙蓉さんのお母さんが出てきました。

「あら？どちら様でしょうか？」

「初めまして。今日からお隣の家に住むことになった神崎です。」

「引っ越しの挨拶をしようと思い、隣に住んでいる芙蓉さんに挨拶
をしに来ました。」

二人とも丁寧だな　僕がそう考えていると、芙蓉さんが

「まあまあ、引越しの挨拶ですか」でしたら、家が上がって下さい、丁度今近所に住んでいる方達も居ますし、父と娘も居るので、是非御上がり下さい」

それなら挨拶する手間も省けて一石二鳥じゃないか

「そうですか」でしたら、お言葉に甘えて上がらせて頂きますね

「いえいえ」さあ、どうぞ上がって下さい

「お邪魔します」

僕が元気良く言うと

「あらあら」元気の良い息子さんですね

「はい」自慢の息子です

「えへへ」

何かそう言われると照れるな

「是非、娘とも仲良くしてください」

「はい！もちろんです」

仲良くしてくださいか、早くも友達出来ちゃうかな、楽しみだな

リビングに着くと、芙蓉さんのお父さんと僕と同年位の女の子と、芙蓉さんとは別の両親と、これまた同年位の男の子が居た。

「何かあの女の子と男の子全然喋ってないな．．．照れ屋さんなのかな？」

僕はそう考えていた。

「（仲良くなれたら良いな．．．）」

あ、そう言えば手土産渡すの忘れてた。僕はそう思い、キッチンでお茶やお菓子の準備をしている芙蓉さんのお母さんの所へ行った。

「（何て呼んだら良いんだろ．．．おばさんって呼ぶには若すぎるし．．．妥当にお姉さんで良いよね？）あのーお姉さん」

そう呼ぶと、芙蓉さんのお母さんは嬉しそうにこっちに向いた。

「あらー♪お姉さんだなんて嬉しい事言ってくれるわね♪どうかしたの？」

「あの、これ．．．お気に召すかどうかは分かりませんが、どうぞ。」

僕はそう言っ、手土産（箱に入ったタルト）を渡した。

「あらあら♪丁寧にもありがとうね♪」

きちんと渡せて良かったー結構冷や汗かいた気がしたよー

「中身は何かしらっ」・・・これはタルトじゃないっつふふ、私好きなのよねタルトっ」

どうやら喜んでくれたようだっ

「早速このタルトを切って、皆で食べましょうっリビングで待ってねっ」

リビングの方へ向かうと、とても賑やかになっていた・・・相変わらず女の子は黙っていたけどね。

「おう光麻。こっちにおいで。」

パパが手招きをして僕を呼んだ

「なっくにパパ？」

「光麻、自己紹介まだしてないだろ？」

「うん」

「なら、早く自己紹介をしなさい。皆楽しみにしてるからさっ」

「あ・・・うん！えっと、僕の名前は神崎光麻です。嫌いな食べ物は無いです。代わりに、好きな食べ物ならいっぱいありますっこんな感じで良いかな？」

「ええ、十分良かったわよっ」

「ほゝ、光麻君は嫌いな食べ物が無いのか。偉いな」

「ありがとうございます」えへへ」

褒められるのはあんまり慣れてないから照れるな

「じゃあ私達も自己紹介しましょうか」

「そうだな、では私から。私の名前は土見隼人だ。で、そっちに居るのが」

「土見由紀と言います」よろしくね」

何故だろう・・・二人とも若いですね。そう考えると、男の子が

「僕の名前は土見稟です。これからよろしくね。」

そう言って手を前に出した・・・握手だね

「うん。こちらこそ、これからよろしくね」

僕はそう言っ、握手をした。あとは・・・あの女の子とその両親だね。

「じゃあ今度は私達の番だね。私の名前は芙蓉幹夫です。今キツチンに居るのが芙蓉湊だよ。さ、楓も自己紹介しなさい。」

「う・・・」

女の子はそう言っ、俯いてしまいました・・・恥ずかしいのかな？

僕はそう思い、女の子の方へ行った。

「・・・っ!」

女の子は僕がこっちへ来て、びっくりしているようだ。

「ねえ」

「は、はい!」

相当恐がっているようだ・・・

「僕は君と友達になりたいな♪あ、もちろん稟君ともね」

「私と・・・友達に?」

「うん。君と友達になりたい。でも、友達になるためには自己紹介が必要だね♪だから、名前を覚えてくれないかな?」

僕がそう言つと、女の子の顔が笑顔になった

「!?...はい!私の名前は芙蓉楓です。」

「そうか楓ちゃんか♪じゃあ、今から僕と楓ちゃんは友達だね♪」

「ふふ、そうですね♪今から、私と光麻君は友達ですね♪」

「違つよ楓ちゃん。」

「え?」

「稟君とも、僕とも友達だよ」ね」稟君」

「う、うん。僕も楓ちゃんと友達になりたいな。」

「稟君．．うん！私も稟君とも友達になりたいです。」

「よし、三人で握手をしよう」

僕はそう言つて、左手に稟君の手を、右手に楓ちゃんの手を握つた。

「これからも、三人友達でいようね」

「うん！」「はい！」

三人の手は、きちんと握られていた．．．

第四話（過去編）（後書き）

急展開すぎるかな？文才を下さい。

感想等よろしくお願いしますね

第五話（過去編）（前書き）

ご都合主義ですね・・・はい

第五話（過去編）

手を繋ぎ終わった後、僕はこう思っていた・・・

「（この繋がり壊したくない・・・これからどんな困難が待っている・・・絶対に守ってみせる！）」

そう固く決意をしていると、キッチンから楓ちゃんのお母さんが来た。

「お茶の準備が出来ましたよっ」

時計を見てみると、現在午後2時。おやつには早い時間だが、まあ気にしないでおこう。

「お茶以外に、神崎さんが持ってきてくれたタルトもありますよっ折角ですし、皆で食べましょうっ」

「じゃあ、あなたっ言葉に甘えて戴きましょうかっ」

「そうだなっでは、戴くでしょうかっ」

『いただきますっ』

「あゝんっ・・・うゝん美味しいっ流石有名店のイチゴタルトだねっ」

「はいっこのタルト特有のサクサク感・・・それにイチゴの絶妙な甘さがとてもいいですねっ」

皆美味しそうにタルトを食べていました。すると、楓ちゃんが僕にタルトが刺さったフォークをこっちに向けて来ました。

「あの・・・光麻君・・・その、あゝん」

「あ、あゝん」パクリ

何か恥ずかしいな

「うん・・・美味しいよ楓ちゃん」

「そ、そうですね」

「あらゝ楓ったらやるわね」

「お、お母さん！」

「しかも、間接キスだなんてゝまだまだ若いのに大胆ね」

そこまで言われると、楓ちゃんは顔を真っ赤にしていた・・・僕も恥ずかしいんだけどね。しかも、お母さんとお父さんもニヤニヤしてこっちみてくるし・・・何か嫌だな。

しばらくすると時計が、3時位になろうとしていた。

「では、そろそろおいとまさせて頂きます。」

「もっとゆつくりしていけば良いのですよ？」

「いえいえ、他の人達にも挨拶をしなければならぬので・・・」

「そうですか？では、また今度いらして下さいな？」

「はい」では、お邪魔しました」

「お邪魔しました」楓ちゃん、稟君また学校でね」

「はい」「おう」

二人の返事を聞いた後、僕達は芙蓉家から出た。友達が出来て良かったな。

さて、次は誰の家に着くんだろう？僕は、とてもドキドキしていた。

第五話（過去編）（後書き）

さて・・・すいませんでした！楓のキャラを壊したなら謝ります。
すいませんでした！

ああ・・・原作やらないとな

第六話（過去編）（前書き）

今回は日本語の使い方がおかしい＆文が滅茶苦茶の可能性があるのでご了承下さい

第六話（過去編）

楓ちゃんの家を出る頃には、時刻が午後3時30分を指していた・
・早く挨拶を済ませないかね。

「（やっぱり近所つてなると、楓ちゃんの家を除いておばさんばかりなのかな？）」

僕の予想は当たり、歳を取った方が多かった。けど、皆優しそうで良かったな。

流石に時間带的に、玄関での挨拶のみになった。僕達が挨拶をする
と、笑顔で答えてくれたのでスゴく心地よかったです。

ふう〜。大体は挨拶はしたな〜

「よし、光麻。あと二軒くらい挨拶回りをしたら、家に帰って荷物の片付けをしようか。」

「はい」

次に見た家は、壁が白一色で、屋根が赤い色をした、なんともシンブルな家だった。

「じゃあ押すか。」

ピンポン

この音いい加減聞き慣れたね。そんな風に考えていると、ドアが開き、老眼鏡？をかけたおじいさんが出てきた。

「ん？どちら様ですか？」

「この近くに引越して来た神崎です。今日は挨拶をしに来ました。」

「ほうほう挨拶とな。では、私達も挨拶をしないとな。ちょっと待っててくれ。」

おじいさんはそう言って家の中に入っていった。

少し待っていると、おじいさんが二人の女の子を連れて戻って来た。

「すまないな。では改めて、私の名前は朝倉純一だ。ほれ、由夢と音姫も挨拶しなさい。」

『・・・・・・・・』

純一さんがそう言っても、二人は黙っていた。やっぱりいきなりだとそうなるのかな？だったら僕が先に挨拶しようっと。

「えっと、僕の名前は神崎光麻って言うんだ。よろしくね（ニコッ）」

『・・・／／／／』

あれ？二人とも何か顔が赤いな・・・風邪かな？そう思っていると
おだんごヘアーの子が

「ゆめ」

「え？」

「朝倉由夢」

「へえ～由夢ちゃんか～可愛い名前だね。」

「えへへ～／／／／」

「むっ・・・おとめ」

「え？」

「だから！朝倉音姫！」

「おとめちゃんも可愛い名前だね。」

「・・・／／／／」

素直に感想を言うと、音姫ちゃんは、また顔を赤くした・・・やっ
ぱり風邪なのかな？

「あらあら♪青春ね♪」

ママが何か言ってるけど、気にしないでおう。

「ああそうそう。私の名前は神崎由香って言つの。よろしくね。」

「因みに俺の名前は神崎総司だ。よろしくな。」

こんな感じで朝倉家との挨拶は終わった。

「では、そろそろ失礼します。」

「うむ。いつでも遊びにおいで。」

「これから仲良くしようね。」光麻お兄ちゃん。」

「うん。」よろしくね。」

「それでは・・・。」

「バイバイ。」由夢ちゃん、音姫ちゃん。」

「うん。」またね。」

「・・・またね。」

由夢ちゃんは元気良く、音姫ちゃんは小さい声で手を振ってくれた。
何かくすぐったいな。

く自宅にて

「ただいま」

「さあ、さつさと荷物を片付けるか。」

予め、必要最低限の家具は業者の人が置いてくれたため、実質そんなに時間はかからないと思う。

「とりあえず食器を棚に入れるか。」

「はい。」

その後は、作業を終えて、晩御飯を食べて、お風呂に入って、自分の部屋のベッドに横になったら睡魔が襲ってきたので、打ち勝てずに、眠ってしまった。

こんな感じで長い1日が終わった。皆と仲良くしなきゃね。

第六話（過去編）（後書き）

因みに、主人公はフラグを建てていますV（＾－＾）V

第七話（過去編）（前書き）

さささしてる気がする・・・

第七話（過去編）

次の日、朝の5時に目が覚めた僕は、庭に竹刀を持って行った。

外に出てみると、やはり春の朝と言うだけに若干肌寒い。

「寒くても、鍛練はちゃんとしないとな・・・」

ちなみに、朝にやる鍛練は素振りを300回やることと、色々な剣技を試したりする事かな。

「さて、やるかな。」

今日は日曜日だし、長くやってても、あんまり問題は無いよね。

「よし・・・つぶ！・・・」

それから、僕は黙々と素振りをする。そして、辺りには、竹刀を振る音のみが流れていた・・・

「ふ！・・・ふうー今日は素振りはこれくらいにするかな。」

ちなみに、今日はいつもの300回ではなく、400回素振りをしていた。

家の時計を覗いて見ると、時刻は朝の6時。素振りだけで1時間も

経ってしまった。母さんもそろそろ起きる頃だし、あと30分鍛練したら、今日の所は止めとこう。

さて、素振りはしたから、後は剣技でもやろうかな。

「でも、あんまりやり過ぎると、近所迷惑だからな……簡単な剣技にしとくか。」

しかも此処は自分の家の庭だからな。あんまりやり過ぎて、後で大変な事にならないようにしないといけないから、結構大変である。

「今日は誰かに、島を案内して貰おうかな。」

楓ちゃんか、由夢ちゃんもしくは、音姫ちゃんにでも案内してもらうかな……皆の用事が無ければの話だけどね。

「さて、それじゃいきますか。“蒼破刃！”」

高速で竹刀を下から振り上げる感じで竹刀を振ると、真空波が用意しておいた木に向かっていった。ドン！

そんな音を聞こえたので、木を見てみると、木が粉々になっていた。

「相変わらず威力凄いな。使った自分でさえ驚いちゃうよ。」

鍛練はこの辺にしとこうかな。母さん起きたし。さつさと朝食の手伝いを……って言っても、皿を並べる位だけだね。

「（汗かいたけど、風呂は朝御飯の後で良いか）」

そんな事を思いつつ、家に戻って行った。

第七話（過去編）（後書き）

とりあえず、感想をくれたら・・・嬉しいなー
♪

第八話（過去編）（前書き）

急いで書いたので、いろいろおかしいかも知れませんが、ご了承ください。

第八話（過去編）

「（ふう）やっぱり鍛練すると汗かくね。」「僕はそう思いながら、シャワーを浴びていた。」

「ふう・・・そろそろ出るかな。」

ちなみに、家には僕とお母さんだけで、お父さんは早速仕事なのか朝早くから出掛けてしまった。

「お母さん、今日、僕初音島を探索してくる。」

「あら？誰かと一緒に行くの？」

「んゝ誰かとして訳じゃないけど・・・とりあえず楓ちゃん辺りに、暇があるか聞いてみるつもりだけど・・・」

「ふうん。行くのは構わないけど、もうちょっと時間が経ってから行きなさいな」

確かに、今は朝の9時。行っても迷惑になるだけかな。

「分かった。じゃあ、あと1時間したら行くよ。」

そして1時間後・・・

「じゃ、行ってきました。」

「暗くなる前に帰って来なさいよ。」

「分かった。」

早速楓ちゃんの家に向かった。

隣なので、すぐに着いたけどね。じゃあ、早速呼び鈴を鳴らそうかな。ピンポーン

「（楓ちゃん居るかな？）」

しかし、待ってみても誰も出てこなかった。

「（留守かな？だったら、由夢ちゃんの家に行こうと。）」

そう思い、僕は朝倉家に向かって行った。

「（さて・・・朝倉家に着いたけど・・・由夢ちゃん達居るかな？）」

「

考えてても、仕方がないよね。よし、押すか。ピンポン

呼び鈴を押してしばらくすると、ドアが開き中から、由夢ちゃんが
出てきた。

「あれ？光麻お兄ちゃん、何か用でもあった？」

「ああ、いやちょっと初音島を誰かに案内して貰おうかなって思っ
てさ。他の子は留守で居ないから、由夢ちゃんの家に来ただけど
・
・
」

「そうなの？だったら私が案内してあげようか？」

「え？由夢ちゃんが？音姫ちゃんと純一さんは？」

「お姉ちゃんとおじいちゃんは何処かに出掛けちゃったの。」

「えー？もしかして、由夢ちゃん一人で家に居たの？」

「うんそつだよ。でも、おじいちゃんは今すぐ帰って来るよ。寒
いし、一旦お家にかかる？」

確かに、ちょっとだけ寒いな。

「じゃあ、お言葉に甘えて上がりして貰おうかな。」

「どつぞどつぞ」

「お邪魔します。」

「へえ、初めて由夢ちゃん達の家に入るけど、結構良い家だね。」

「ソファーにでも座るところか。」

「うん。分かった。」

「お兄ちゃん、お膝の上に座って良い？」

「良いよ、おいで。」

「わぁーい。」

そう言っ、由夢ちゃんは僕の膝の上に座ってきた。距離が近いため女の子特有の良い匂いがする／＼

「でも、本当に由夢ちゃん一人で留守番してたんだね。偉い偉い。」

そう言い、僕は由夢ちゃんの頭を優しく撫でた。

「わ！くすぐりたいよお兄ちゃん・・・／＼」

由夢ちゃんが気持ち良さそうに目を細めていた。でも、何で顔を赤くしてるんだろう？

「えへへ／＼／」

しかし本当に嬉しそうな笑顔だね。すると、由夢ちゃんは可愛い笑顔のままですごい発言をした

「私ね、将来光麻お兄ちゃんのお嫁さんになる!!」

「お！そりや大きくなったら楽しみだね」

「うん」待っててね。光麻お兄ちゃん」

とても眩しい笑顔でそう言った。この時、僕はまだ知らなかった・・・あんな大変な事になるなんて・・・

しばらく由夢ちゃんとお話をしていると、純一さんが帰って来た。

「ただいま・・・おお光麻君、家に遊びに来たのかな？」

「あ・・・いえ、今日は由夢ちゃんに初音島を案内して貰おうかなって思いました。」

「ふむ・・・初音島の案内か・・・子供だけでは危ないから、私も一緒に行こう。良いか？光麻君。」

なるほど、確かに子供だけでは危ないね・・・

「良いですよ。由夢ちゃんも良いよね？」

由夢ちゃんにも同意を求めると

「ううゝ・・・良いよ。」

何か膨れていたけど・・・何で？

「ほほ、青春だねゝ。じゃあ、行こうか。お昼は食べたかい？」

「いえ、まだですけど・・・」

「なら、ついでに商店街でお昼ご飯を食べようか。私が奢ってあげるよ。」

「え？良いんですか？だったらお言葉に甘えます。」

「なら、行こうか。」

「うんゝ行こう行こうゝ」

「しかし、本当に広いですね。初音島って。」

「そうかい？さて、此処が商店街だよ。」

「うわあゝゝすごいですねゝ」

人もたくさんいるし、店も多いし、とにかくすごいです。

「さて、着いた事だしお昼ご飯を食べようか。」

「はい」

「て言っても、ファミレスだけだね。」

「ファミレス？」

「ファミリレストランの事だよ」光麻お兄ちゃん」

そんな会話をしつつ、僕達はファミレスに入って行った。

「ふー純一さん。ありがとございました。ご飯を奢って貰うなんて。」

「気にせんでも良いぞ。一々気にしてたらかったるいからね。」

「おじいちゃん。商店街までは案内したから、今度は桜公園に行こうよ。」

「ふむ。そうだね。光麻君、今度は桜公園って言う公園に行ってみようか。」

「はい。」

「早く行こ？光麻お兄ちゃん、おじいちゃん。」

由夢ちゃんはそう言うと、僕の手を掴んで走り出した・・・純一さんは歩いてたけどね。

「桜公園にて」

「此処が桜公園だよ。」

「・・・すごい。桜の木がこんなにあるなんて・・・僕、初めてのみた。」

僕の目の前の光景・・・それは、沢山の桜が咲いていた。

「これだけじゃないんだよ。この桜公園には、秘密基地があるんだよ。」

「秘密基地？」

「こっちに来て」

由夢ちゃんが手招きをしているので、着いていってみると

「！？」

何と、一本の巨大な桜の木があった

「綺麗でしょ？」

「うん・・・確かに綺麗だね・・・」

でも何か引つ掛かるな・・・何でこの一本だけこんなに大きいんだ？そう疑問に思っていると、純一さんがその疑問を解決してくれた。

「この木はな・・・願いを叶える枯れない桜なんだよ。」

「これが・・・枯れない桜・・・」

でも、枯れない桜はもう枯れたはずじゃあ・・・なのに、何で咲いてるんだ？もしかして、誰かがこの木に対して何かをしたのか？・・・考え過ぎかな。

「さて、二人共。そろそろ帰ろうか。大体初音島は案内しただろうし。」

「もうそんな時間ですか？」

腕時計を見ると、現在午後5時。子供は帰る時間だね。

「それじゃ、帰ろうか。」

「うん」 「はい」

そして、家に帰って行った・・・

「それじゃ光麻君。また何時でも遊びに来なさい。」

「はい。分かりました。」

「光麻お兄ちゃん♪今日は楽しかったよ♪」

「うん。僕も楽しかったよ♪」

「今度は、お姉ちゃんとかと一緒に遊ぼうね。」

「うん。分かった。」

「それじゃ、またね♪」

「バイバイ」

ボタン。

ドアが閉まった音を聞きき、僕は家に帰った。

僕は寝る前、枯れない桜について考えていた・・・

「（何であの木が咲いてるんだろう・・・パパは枯れたって言うってたけど・・・しかも、あの木に近づいたら、何か不思議な感覚だったし・・・これ以上考えても無駄だね。さ、明日は小学校に転入するんだ。早く寝ないとね。」

く
一方枯れない桜の木にてく

「
．．．．．
」

一人の女の子が居た．．．

第八話（過去編）（後書き）

はいw由夢ちゃんに完全フラグ建てましたねw

何か、二話と話が矛盾しているような気がします。が、気にしない方向でよろしく願いしますw

感想等、あったらよろしく願いします。

第九話（過去編）（前書き）

更新遅れてすみませんでしたm(_ _)m

今回は、あまり自信が無いので、いっちょ承下さいm(_ _)m

第九話（過去編）

次の日、僕はいつもより遅く起きた。

「ふあゝ眠い。（考え事してたらあまり寝れなかったな）」

ちなみに、考え事というのは、あの枯れない桜の事です。

「さて、今日から学校に行くんだし早く準備しとこつ。」

さて、そろそろ学校に行きますか。

「行つてきまゝす」

「行つてらつしゃい」

お母さんにそう言つて家を出ると、丁度楓ちゃんと稟君が歩いていました。とりあえず、二人に声をかけてみましょう。

「おゝい。楓ちゃん、稟君」

二人は僕の声の聞くと、こっちに振り向いてきた。

「あ、光麻君。おはようございます。」

「あれ？光麻も学校行くのか？」

「うん。楓ちゃんや稟君と一緒にの学校だよ。」

「そうですか♪では、学校でもよろしく願いしますね♪」

「俺からもよろしくな♪」

そんな会話をしつつ、学校へ向かった・・・因みに、学校までの道のりを知らなかったので、通りかかった二人に感謝していたのはここだけの話。

「学校にて」

「じゃあ私たちは教室に行きますね。」

「楓ちゃん達と一緒にのクラスになれたら良いな」

ちなみに、楓ちゃんと稟君は一緒にのクラスで、二年二組だそうです。

「まあ俺達と一緒にのクラスになれるように祈っておいたら？」

「分かった。祈っておくよ」

「じゃあ後でな。」

「後でねっ」

稟君達はそう言って自分のクラスに向かって行った。

「さて、職員室行かないとね・・・」

「・・・・・・・・」

はい・・・・・・・・分かってましたよ・・・・・・・・こうなるって事になるくらい。

「職員室ってどこ？・・・」

迷子になってしまいました・・・・・・・・こうなる前に楓ちゃん達に聞けば良かった。

「はぁ・・・・・・・・どうしよう。」

僕がそう呟いていると、一人の女の人が通りかかった。・・・・丁度良いし、職員室がどこにあるかを聞いてみましょう。

「あの．．．」

「はい？」

僕の声に反応して女のが、こちらを向いた。

「あの．．．何か用ですか？」

女の子は突然声を掛けられた事により、警戒しているようだ。さつさと用件を言おう。

「すみません．．．職員室ってどこですか？」

「へ？え、えつと職員室は．．．」

く少女説明中く

「．．．に職員室がありますよ。」

「ほうほう．．．ありがとうございます。これで道に迷わないで済みます。」

「いやいや、困った時はお互い様ですよ」（ニコッ）

不覚にも、女の子の笑顔にちょっとドキッとしていた。

「では、これで．．．あ、そうだ。今度お礼がしたいので、名前だけでも教えておきます。僕の名前は神崎光麻です。あなたは？」

「私の名前は八重桜です。」

「桜ちゃんだね♪職員室までの道のり教えてくれてありがとう♪今度お礼するから。」

「（いきなり下の名前で呼ばれた／＼／＼）お礼なんて良いのに。」

「（ん？何か顔が赤いような気が・・・）いや、それだと僕の気が収まらないからさ。」

「そこまで言うなら、何か考えておきます♪」

「うん♪是非考えておいてね♪それじゃあね♪桜ちゃん。」

「じゃあね神崎君♪」

（桜side）

あの子って転校生だよね・・・神崎光麻君か・・・

「（見た感じ学年も一緒だし、もし一緒のクラスだったら仲良く出来たら良いな・・・）」

あ、私も早く教室に行かないと。私は足早にその場を去った。

「職員室にて」

「ここが職員室か・・・とりあえず間に合ったな。」

桜ちゃんに教えて貰わなかったら完全に遅刻していただろう。

「さてと、入るか。（ガラ）失礼します。」

扉を開けると、その場に居た先生たちが、一瞬こちらを向いた。

「ええと・・・今日から転入してきた神崎光麻ですけど・・・」

僕が自分の名前を言うと、一人の女の先生がこちらに歩いてきた。
「凄いグラマーの人だな」

「君が神崎君ね。少し来るのが遅い気がするけど・・・」

「ちよつと職員室までの道のりが分からなくて・・・これから気を
つけます。」

「よろしい」あ、ちなみに私は担任の天江夕陽ですよろしくね。じ

「やあ今から教室に向かうから着いてきてね。」

「分かりました。」

「ちなみに、神崎君のクラスは二年二組よ。」

「本当ですか！良かった。」

「あら♪嬉しそうね♪」

「友達と一緒にのクラスになれたので、嬉しいです♪」

「あらあら♪それは良かったわね♪」

「はい♪」

僕と先生は、歩きながらそんな話をしていた。

楓 side

「教室にて」

「光麻君・・・迷わずに職員室に行けたかな？」

「さあな。でも、大丈夫だろ。」

「そうだと良いんですが・・・」

私達がそんな話をしていると、先生が教室に入って来た。

「はい。皆席に着いてね。」

皆が席に座り、静かになると、先生が話を始めました。

「はい。今日は皆に素敵なお知らせがあります。」

それを聞くと、皆がざわついてきました。

「はい、静かに。」

皆が再び静かになると

「今日はこのクラスに新しい仲間が入ります。皆仲良くしてあげてね。特に女の子達。期待しても良いわよ。」じゃあ、神崎君が入って来て。」

く光麻 sideく

「じゃあ私が呼んだら入って来てね。」

「はい。分かりました。」

先生が教室に入って行くと、それまで騒がしかった教室が一変して静かになった。

「はい。今日は皆に素敵なお知らせがあります。」

それを聞いたクラスの人達は、また騒がしくなった。しかし

「はい静かに。」

そう言うと、またもや静かになった・・・あんまり静かだと入りづらいただけだね

「今日はこのクラスに新しい仲間が入ります。皆仲良くしてあげてね。特に女の子達、期待しても良いわよ。」じゃあ、神崎君、入って来て。」

「（ちょ、先生！何を言ってるんですか！そんなこと言われると余計に緊張するわ！）」

と心の中で思いつつ、深呼吸をして扉を開けた。すると、クラスの人達がこちらを見てきた。僕は素早く黒板の前に立ち、自己紹介をした。

「初めまして。僕の名前は神崎光麻です。両親の都合で、前の居た町からこの初音島に引っ越して来ました。まだ知らない事もたくさんありますが、これからよろしくお願いします（ニコッ）」

「・・・・・・／／／／／」

あ、あれ？皆しーんとしてる。それに皆、顔が赤いような・・・は

！もしかして、僕まづいことしちゃった！？

僕がそう思い、焦っていると先生が助け船を出してくれた。

「皆初めての転校生に緊張してるのかな？とりあえず神崎君」

「はい？」

「君の席は、あそこ。あのオレンジ色の髪をした女の子の隣だよ」
オレンジ色の髪をした女の子。つまり楓ちゃんの隣か、良かった」

「分かりました。」

先生にそう言われ、席に移動した。席に座ると、楓ちゃんが話しかけてきた。

「光麻君、一緒にクラスになれて良かったですね。これからよろしくお願いします」

「うん、僕も楓ちゃん達と同じクラスになれて嬉しいよ」こちらこそこれからよろしくね」

「はい」

そんな会話をしていた。

「じゃあ一時間目は神崎君の質問タイムの時間を取ります。皆どんどん神崎君に質問して良いわよ」

すると、皆が一斉に質問をしてきた。質問って言っても、定番の質問が多かったけどね。例えば好きな食べ物とか、どこから来たのか色々質問された。

そんな感じで、一時間目の時間は過ぎていった。

第九話（過去編）（後書き）

もう駄目だ（＞Σ＜）何か文が滅茶苦茶だ

感想等あったらよろしくお願いします。

第十話（過去編）（前書き）

今回は、短いですが頑張ってみました。

第十話（過去編）

そしてあつという間にお昼の時間になった

「え？そんなのありですか？」

良いんだよ・・・俺の文才が無いから

「それを言ったら終わりなのは・・・」

「光麻君？誰に話しかけてるんですか？」

「いや、何でもないよ楓ちゃん。」

さて、ボケはこの辺にしまして・・・

今はお昼休みの時間で、皆家からお弁当を持ってきています。ちなみに、今は楓ちゃんと稟君と桜ちゃんと一緒にご飯を食べています。

「しかし、光麻と桜が知り合いだったとはね・・・」

「知り合いって言っても、職員室が分からなくて、僕が迷っていた所に偶然桜ちゃんが通りかかった時に、道を聞いただけなんだけどね。」

「あの時はびっくりしたけどね。いきなり話しかけてきて、職員室はどこですか？なんて聞いてくるもんね。」

「やっぱり光麻君・・・職員室の場所が分からなかったんですね。」

「全く・・・職員室の場所が分からないなら、何で俺達と一緒に居る時に聞かなかったんだよ？」

「その・・・忘れてて・・・テへ」

ノリでやってみただけ・・・やっぱり気持ち悪いですね。今度からは止めときましようか。しかし、なぜか女の子二人組は

『／／／／（か、可愛い／／／／）』

顔を赤くしていた・・・何で？

そんなこんなで、お昼休みがあつという間に終わった。

「さて・・・次の授業は何だったっけ。」

そして時間は過ぎ、放課後になった。ちなみに放課後は、上級生達が部活をやっている。

「さてと、皆帰ろうぜ。」

「あ、待ってください。」

「楓ちゃんと光麻君、早く〜」

稟君と桜ちゃんがそう言ってきた。

「稟君、僕ちよつと用事があるから先に帰ってて。」

「そうか・・・用事があるなら仕方がないな。じゃあ光麻。また明日な。」

「バイバイ〜光麻君。」

「光麻君。また明日。」

「うん。バイバイ〜」

そう言つと、稟君と桜ちゃんと楓ちゃんは帰って行つた。

「さてと・・・もう一回行つてみるかな・・・あそこに。」

あ、でもその前にママに連絡しないとね。そう思い、僕はランドセルにこっそり仕舞つてある携帯（子供が使つても大丈夫な携帯）を取りだし、家に電話した。しばらくのコール音のあとに、家に繋がった。

「はいもしもし。」

「あ、お母さん。」

「あら光ちゃん。どうかしたの？」

「今日帰るの遅くなるから。」

「あら、何か大事な用事でもあるの？」

「うん．．．とても大事な用事がある」

「ふん．．．分かったわ。でも、だからといって遅くなりすぎないようにしてね。」

「分かってるよ。じゃあお母さん。切るよ」

「最低7時までには帰って来るのよ。」

「はい。」

そう言うと、電話が切れた。

ちなみに、今の時間はちょうど5時。

「さてと．．．行きますか。」

僕は、ある目的地に歩いて向かった．．．そう、この時のこの選択により、1つの歯車が回る事を僕は知らなかった．．．。

第十話（過去編）（後書き）

光麻が向かう先とは一体どこなのか・・・

感想等あったらよろしくお願いします。やる気が出ます。

第十一話（過去編）（前書き）

結構goodしているかも

第十一話（過去編）

「・・・・・・・・・・」

何で・・・

「ここは・・・どこだ？」

何で僕はこう道に迷うんでしょうか・・・方向音痴のスキルでもあるのかと考えてしまいます。ちなみに今は、見知らぬ住宅街に居ます。

「どうしよう・・・もう暗くなってきたし・・・」

今の時刻は6時過ぎ。早く行かないと帰宅までに間に合いません。

「何とか出来ないかな・・・ここは誰かが通りかかるのを待つか。」

僕がそう一人言を呟いていると、近くを一人の金髪の女の子が通り過ぎていった・・・何やら急いでるようだ。

「どうしたんだろ・・・あの子・・・ちょっと付いていつてみようかな。」

この住宅街からも抜けれるだろうしな。

僕は、女の子を見失わないようにと、気配を消して付いていった

しばらく女の子の跡を付いていってみると、いつの間にか桜公園に到着していた。

「（ふ）何とか着きましたね。しかし、あの女の子．．．まさかとは思いますが、あそこに行くつもりなのかな？」

僕が疑問に思っていると、女の子は僕の予想通りの道を通って行った。

「．．．．．」

予想は当たり、女の子はここへ来た。そう、枯れない桜の木がある場所だ。

「（でも、ここへ来て一体何をするつもりなんだろう．．．願い事でもするのかな．．．）」

僕がそう考えていると、女の子が木の前に立ち止まった。すかさず女の子に気付かれないように、近くにあった木の裏に隠れた。

「．．．．．る」

女の子が何かを呟いているが、ここからじゃ聞こえないな．．．

「（もうちょっと耳を近付けてみようかな．．．）」

木の裏から、ちょっと身を乗り出し、声を聞いてみると．．．

「分かってる．．．僕のしようとしている事は間違えだって．．．」

女の子の悲痛な声が聞こえた。

「でも．．．それでも僕は．．．」

「お願いです．．．僕にも．．．“家族”を下さい。」

女の子がそう言うと、桜の木が光始めた。

「（な、何だ！？）」

僕が慌てていると、光は収まり、木の近くに一人の男の子が居た．．

「（まさか．．．あの女の子が家族を下さいって願ったから．．．あの男の子が桜の木から生まれたのか！？）」

僕は啞然としていた。すると、男の子が目を覚まし、焦点が合わさってない目で女の子を見ていた。そんな男の子に対し、女の人は優しく微笑みかけ、こう言った

「桜内義之」

「え？」

「それが君の名前だよ。」

「さくらい．．．よしゆき．．．僕の名前。」

「今日から君は僕と一緒に暮らすんだよ。」

「……………」

男の子が呆然としていると

「さあ、行こう」僕達が帰る家へ」

女の人がそう言って、手を差しのべていた。

「！……………うん！」

男の子は突然の事に躊躇しつつも、差し伸べられた手を笑顔で握った。

僕は見るのに夢中になっていた。しかし、夢中になっていた僕は、警戒心が薄れ、身を乗り出し過ぎていた。当然、そんななかでバランスが取れる訳が無く

「！つととと」

ドーン

そんな音を立てて僕は転倒してしまった。すると、女の人が

「誰！？」

と言って、こちらを見てきた。

「あちゃ……………バレちゃったか……………」

僕が素直に姿を現すと、女の人が男の子に何かを言っていた。

「ちょっと僕。この男の子と話があるから、義之君は彼処で待ってね。直ぐ戻るから。」

「う、うん。分かった」

男の子が何処かに行ってしまった・・・さてと、何を言われるんだろつか・・・

「ねえ。君は一体いつから見ていたの？」

「え・・・っと、最初から見えました。」

「最初から！？じゃあ僕が言っている事も聞いてたって事！？」

「は、はい・・・」

「・・・」

女の方は愕然としていた。ちょっと聞いてみようかな。

「あ・・・あの。聞きたい事があります。」

「・・・何を聞きたいのかなあ？」

女の人がこちらを睨み付けて言う。まあ、正直睨み付けても可愛いだけだねと思ったのはここだけの話

「何でこの桜の木は枯れていたのに、また咲いてるのかを聞きたい

のですが．．．」

「．．．．．それは」

「それは？」

「僕が．．この桜の木を再び咲かせたの．．．」

やっぱりか．．薄々気づいてはいましたね。

「僕がやってる事は悪いことだって分かってる．．でも、それでも僕は．．．」

「なるほど．．．１つ気になったんですが、この桜の木は願いを叶えるんですよね？」

「．．．そうだよ」

「つまり、良い願い事も叶えるし、悪い願い事も叶える．．．という事ですね。」

そう言つて、僕は桜の木に触れてみました．．．何だ．．．この変な感じ．．．桜の木に何かが宿ってるのかな．．．

僕がそう考えていると、女の人がさらに睨み付けてきた。

「何で．．．」

「はい？」

「何でそこまで分かってても何もしないの！君だって、この桜の木がどれだけ危険な物分かるでしょ！」

女の人の叫びが響いた・・・

「・・・僕は、もう一人になりたくなかったから・・・だからこの桜の木を咲かせた・・・いけない事だと分かっている・・・でも、この桜の木は願いを何でも叶えてしまう・・・欠陥している桜の木なの。」

「・・・・・・・・」

「そんな桜の木を・・・僕は咲かせてしまった・・・だから僕が何とかしないとイケないの」

「・・・それは誰かに相談とかしたんですか？」

「・・・出来るわけないよ・・・これは僕の責任だもん。」

「そうやって一人で背負い込んで何とかするんですか？僕はそうは思いませんけど。」

「君に何が分かるの！、しょうがないじゃん！これは僕が撒いた種だし・・・」

女の人が動揺してる・・・でも、僕は思う。一人で抱え込んで悩むより、誰かに助けを求めて悩む方が良いと思う。

「分かっているのは貴女の方です！どうして人を頼らない？どうして一人で抱え込む方を選ぶ！貴女にとって、身近な人とはその程

度の存在なのか！」

「……………！じゃあ君が何とかしてくれるの！」

「ああ！何とかしてやる！俺が貴女の傍に居る。一緒に悩んでやる！だから、もう一人で背負い込むな！」

俺がそう言うと、女の方は泣き始めた。俺は女の方を抱き寄せ、そつと頭を撫でてあげてる。

「辛かったよな……一人は……」

しばらく女の方の押し殺した泣き声だけが辺りに響いていた……

「もう良いんですか？」

「うん／＼ごめんね……あんな事言っちゃって。」

「いえいえ、気にしないで下さい」(ニコッ)

「／／／／／」

やっぱり僕が笑顔を見せると皆顔を赤くするよね……何でだろう

「ねえ．．．」

「はい？何ですか？」

「さっき言つてた傍に居るって本当？」

「当たり前じゃないですか！」

「そ．．．そつか／／あ、ありがとう／／」

「い、いえ／／」

顔を赤くしてお礼を言われると、こっちまで照れます／／

「あつ、それと桜の木に関しては今は何も出来ません。」

「な、何で！」

「今の僕の体では、限界があるからです．．．何とかするにしても．．．あと7年は必要です。」

「そつか．．．でも、無理はしないでね？」

「分かってますよ。」

「だったら良いけど．．．あ、自己紹介がまだだったね。僕は芳乃さくら。君は？」

「僕の名前は神崎光麻です。」

「へえ、光麻君か、良い名前だね。」

「さくらさんこそ。可愛い名前じゃないですか。」

「にやはは／＼ありがとう／＼あ、さん付けは無しね。名前で呼ぶこと（ビシッ）」

さくらさんが人差し指を真っ直ぐ伸ばして言った。

「え．．．えっと．．．さ、さくら／＼」

「うんうん、よろしい。」

うっ．．．何か恥ずかしいな／＼

「じゃあ、これからも宜しくね、光麻君」

「は、はい！こちらこそ宜しく（ニコッ）」
その場には、笑顔があった．．．

「それより光麻君。時間大丈夫？」

「え？．．．あああ！」

マズイ．．．非常にマズイ。さくらの説得が意外にも時間がかかつ

たため、現在8時オーバー。つまり、お母さんが言っていた時間までに間に合わなかったって事になりますね。

「にやはは、こんなに暗いし、僕と義之君と一緒に帰ろうか。」

「あつ、はい。」

「さ、行こ？義之君が待ってるし。」

「はい。」

一方義之はというと・・・

「うつ・・・さくらさんまだかな。」

一人ぼつりと居た。

第十一話（過去編）（後書き）

さくらにフラグを建てましたねw

でも何か・・・文章駄目だなゝああ、テスト面倒だなゝ

感想等ありましたら、宜しく願います。

第十二話（過去編）（前書き）

今回はちょっと自信がありませんが、見ていってください

第十二話（過去編）

「
♪♪♪」

僕は今、さくらと義之君と一緒に手を繋いで帰っています。あ、ちなみに、義之君とはもう自己紹介しましたよ。

「随分嬉しそうですねさくら。」

「うん♪当たり前だよ♪なんたって・・・大切な二人に出会えたんだからね♪」

「さ、さくらさん・・・」

「僕も、さくらは大切な人だよ。ね、義之君？」

「え？・・・うん！当たり前だよ！」

「にやはは♪ありがとう義之君♪光麻君♪・・・ただ、光麻君の場合はちよつと違うんだけどね・・・」

「え？何が違うんですか？」

「いや、まだ分からなくて良いよ・・・まだ子供だもんね」

「?????」

さくらの言いたい事がよく分かんないな・・・まあ良いかな。

ちなみに、今の状態はさくらの左手を僕が繋いでて、右手を義之君が繋いでる状態だよ。

「（しかし．．．枯れない桜の木をどうすれば良いのか．．．多分下手に制御したら、義之君がどうなるか分からないな．．．まだ時間はあるし、考えておきましょうか。）」

そんな事を考えながら歩いていると、いつの間にか朝倉家に着いていた。

「ここが今日から君の家だよ」

「ここが？」

義之君は戸惑っているようだ。そんな義之君をお構い無しに、さくらは、チャイムを鳴らした。すると、ドアが開き、中から由夢ちゃんと音姫ちゃんが出てきた。

「あ、さくらさんと光麻お兄ちゃんと．．．誰？」

由夢ちゃんが義之君をじつと見て、さくらにそう聞くと

「にやはは、こんばんは由夢ちゃん。

「こんばんは。」

由夢ちゃんが挨拶をする。

「この子が前に言った桜内義之君だよ」

「うんうん」

由夢ちゃんが二回首を振って頷く

「え．．．あの．．．その」

頷いても尚じーつと見る由夢ちゃんと音姫ちゃんに対して、義之君が対応に困っていると、さくらが

「じゃあ僕はお兄ちゃんと話して来るから、じゃあ義之君？由夢ちゃんと言姫ちゃんにきちんと自己紹介しなきゃダメだよ？」

そう言つと、さくらは家の中に入つて行つた。突然の事に義之君が戸惑つて

「え．．．ちよつとさくらさん！」
と呼ぶと、さくらが

「ちゃんと仲良くしないとダメだよ」

と返事をして家の中に入つて行つた。

『じー』

二人が義之君をじつと見ている．．．二人ともじつと見すぎだよ

「うっ．．．」

二人の視線に耐えれなくなつたのか、義之君が助けを求めてこちらを見てきた。

「ほら。早く自己紹介しないと。いつまでもここにいてるつもりなの？」

僕が義之君に聞くと、恥ずかしながらも、言う気になったみたいで「えっと．．．その．．．ぼ、ぼくのなまえはさくらい よしゆきです。」

と言って左手を差し出した．．．が、二人は差し出された手をじっと見ていた

「あ、あはは．．．」

堪らず義之君は苦笑いをした。すると由夢ちゃんが出された手を両手で包み込み

「ゆめ」

「え？」

「あさくら ゆめ」

と、僕と初めて会った時と同じように言った。

「ゆめちゃんか．．．」

「うん。その、これからよろしくね．．．よ、よしゆきお兄ちゃん／＼／」

由夢ちゃんは恥ずかしそうに顔を赤くして言った・・・正直由夢ちゃんが可愛く見えて、ドキドキします。すると、ずっと黙ってた音姫ちゃんが義之君の方を向いて一言

「あさくら おとめ」

と言って、家の中に入ろうとしていた。

「音姫ちゃん」

僕がそう呼ぶと、こっちに振り向いた。

「何？」

「何か困った事があったら、僕に相談してね」(ニコッ)

「／／／分かった。」

音姫ちゃんは顔を赤くしながら返事をした・・・何で顔が赤くなるんだろうか・・・

「お家に入ろう」

由夢ちゃんが笑顔でそう言った。

「お、お邪魔します」

はあ・・・ここはお邪魔しますじゃなくて

「『ただいま』だよ」

僕と由夢ちゃんが同時に言った

「え？」

「これからは、義之君も家族の一員なるんだよ？」

僕がそう言つと、義之君はハツとした表情になり、最後は笑顔でこう言つた

「ただいま」

「うん。おかえり」

由夢ちゃんが笑顔でそう言った。

しばらくした後、僕は由夢ちゃん達に挨拶をして、ダッシュで家に帰った・・・

無論、家に帰ったら、お母さんとお父さんにこっぴどく叱られたのは、言うまでも無い・・・

第十二話（過去編）（後書き）

さて、遂に義之が朝倉家と接触しました。これからどうなることや
ら．．．

感想等ありましたらよろしく願います。

第十三話（過去編）（前書き）

今回はオリジナルの話です

第十三話（過去編）

次の日の朝、僕は5時に目を覚まし、寝間着からジャージに着替えて家を出た。

「今日は桜公園でも走ろうかな」

日々の鍛練を怠らない・・・と、お父さんによく言われるので、朝早くから起きて鍛練しています。

「よし！行つてきます」

外に出ると、まだ空は薄暗く肌寒い感じだった

「（学校もあるし、今日は最初から全開で行こうかな・・・）」

僕はそう思い、桜公園に向けて足を進めた・・・

作者「ちなみに、我らが主人公、光麻君は身体能力が異常なので、足はとても速いです」

「ん？何か今、失礼な事を言われたような・・・まあいつか」

「桜公園にて」

「ほっほっほっ・・・」

僕は今、桜公園全域を走っています。大体7周位走りましたね。

「ふう・・・さてと、そろそろ帰ろうかな・・・ってあれ？」

誰かが噴水の近くのベンチに座ってる・・・多分年は僕と同じ位の女の子で、髪の色は水色の綺麗な髪の色をしている。

「（でも・・・あの子何であんなに悲しい表情をしているんだろう・・・よし！声をかけてみようかな。）」

多分声をかける気になったのは・・・放って置けなかったからだね。

「あの～」

「・・・・・・何ですか？」

少女はこちらを向いて返事をした。

「こんな朝早くから何をやってるんですか？」

僕は、気になった事を聞いてみた。

「別に・・・」少女は相変わらずの無表情で答えた。僕は、内心溜め息をはきながらも一つ質問を試してみた。

「そうですか・・・ではもう一つ。何故君はそんなに悲しそうな顔

をしているの？」

「・・・・・・・・」

少女は黙ってしまった・・・が、何かを決めた表情を見ると、僕に話してくれた。

「私ね・・・お父さんとお母さんに捨てられたの」

「え？」

「私の両目の色が気持ち悪いって・・・まるで、獣でも見ているか様に言われたの・・・ハハ・・・二人とも怯えてたな・・・」

少女が笑いながら・・・そして、泣きそうな表情で話してくれた・・・

「（この現実には辛すぎる・・・確かに、この子の両目の色は赤色です・・・だが、ただか両目の色が違うからって自分達の娘を嫌悪し・・・そして、挙げ句の果てに捨てるという行為に出た・・・最悪だな）」

僕がそう考えていると、少女はこう言った。

「私・・・どうすれば良いのかな？・・・学校のクラスの子も私に話しかけてこないし・・・」

「もうやめろ・・・」

少女が、淡々と自分の事を話してくれる事に、耐えれなくなった僕

は、少女にそう言った。

「もう・・・言わなくて良いから・・・君がどれだけ辛かったのも分かった・・・」僕はそれだけ言うと、少女の体を抱き締めた

「この小さい身体で、どれだけの辛い事を体験したことも分かった・・・君が独りぼっちだったって事も分かった・・・でも、これから一人じゃない・・・」

「え・・・」

これだけは・・・これだけ少女に言いたい

「僕が君の傍に居る」

「・・・」

少女の体が震えてるのが分かる・・・そして

「グス・・・うわあああん！」

大声で泣いた・・・今までの辛さを洗い流すように・・・

「これからは、僕も一緒だ・・・僕のお母さんもお父さんも、笑顔で君を迎えてくれる・・・」

僕はそう言って、少女の頭を優しく撫でた・・・

くしばらくして」

「落ち着いた？」

「う、うん／＼／＼．．．その．．．あ、ありがとうね／＼／」

「困った時はお互い様♪」（ニコッ）

「／／／／／／／」

少女は顔を真っ赤にしていた．．．何でだろうね？

「さてと．．．今は5時40分か．．．それじゃあ帰ろうか♪」

「で、でも本当に大丈夫なの？．．．迷惑になったりするんじゃないのかな？」

「大丈夫♪お母さんもお父さんも優しいから、きっと君の事を迎えてくれるよ♪」（ニコッ）

「な、なら良いけど／＼／（もう）／＼／笑顔がかっこよすぎるよ／／／／」

「そう言えば、君の名前は？」

「あ、私の名前は一ノ瀬 悠奈．．．あ、でもこの場合、上の名字は無しで、下の名前だけになるのかな。」

「成る程、悠奈ちゃんか♪じゃあ僕の番だね♪僕の名前は神崎光麻

よろしくね」(ニコッ

「う、うん／＼よろしくね／＼(だから笑顔は反則だよ／＼)」

悠奈ちゃんの顔が真っ赤だけど・・・大丈夫かな？

「それじゃあ、今度こそ帰ろうか、あ、そうだ。手を繋いで帰ろうか、てか、繋いで帰らないと僕の家まで案内出来ないからね」

僕はそう言って、右手を差し出した。

「う、うん。分かった／＼」

悠奈ちゃんは、照れながらも、差し出した僕の手を握った。

「じゃあダッシュで帰るよ。」

「え？・・・ちょ！速すぎるよ」

持ち前の身体能力を全開まで使い、猛ダッシュで家に帰った

く光麻が帰った後の桜公園にてく

さくらside

僕は、朝早くから枯れない桜の木の調整をしていた・・・その帰りに、誰かが居るな～と思い、ベンチの近くにある木に隠れ、話を立

ち聞きしていた。

「（あれ？この声は・・・光麻君と・・・誰？）」

声を聞くと、光麻君と、知らない女の子が話をしていた。

「何を話してるんだろう・・・」

僕は興味本意で聞いてしまった・・・でも、話している内容は残酷だった・・・あの女の子が、両親に捨てられるなんて・・・しかもまだ子供の女の子。聞いていて辛かった・・・すると、光麻君が女の子を抱き締めた・・・その時、一瞬心に「ズキッ」という痛みが走った・・・でも、その痛みはすぐに無くなった・・・

「（僕・・・どうしたんだろう？）」

そんな事を考えていると、話が終わった様で、光麻君が女の子の手を繋いでダッシュで帰って行った・・・どうやら少女の名前は悠奈ちゃんと言っらしい・・・

「光麻君・・・君はスゴいね・・・でも、あの女の子羨ましいな・・・妬いちゃうよ、光麻君・・・」

僕はそんな事を呟きつつ、家に帰って行った・・・

sakura side out

家に帰って、お母さんとお父さんに事情を話すと、二人とも悠奈ちゃんを笑顔で迎えていた。

「悠奈ちゃんの両目綺麗だね」

「ふえ！？／＼あ、ありがとう／＼・・・」

第十三話（過去編）（後書き）

今回はオリキャラを出してみました・・・g d g dにならなきゃ良いですけどねw

今考えたら、主人公のラバーズ凄いですねwまあ関係無いですけどねw

感想等ありましたら、よろしく願いします。

あと、テストが近いですので更新が遅くなります。すみませんm（

— — ）m

オリキャラ紹介1（前書き）

今回は、友達に言われて作ったオリキャラの設定です

オリキャラ紹介1

名前：神崎 悠奈
かんざき ゆうな

年齢：7歳

身長：光麻と同じ位

体重：??kg（女の子に体重を聞くななんて失礼だよ〜）

性別：女

髪色：水色

見た目：髪を伸ばしており、大体腰に届く位の長さをした髪に、アホ毛が2本立っている

性格：主人公に出会う前は無愛想な感じだったが、出会ってから天然な女の子に変わった

魔力ランク：???

目の色：両目とも赤

産まれた時から両目が赤く、両親に気味悪がられていた。さらに、学校でも両目が赤いという理由で友達が出来なかった。

そんな環境のせいで、無愛想な性格になってしまったが、主人公に出会い、かなり変わった

ちなみに、人生を諦めかけた時に、救ってくれた光麻に惚れてしまった

イメージCV：豊崎愛生

オリキャラ紹介1（後書き）

テストが終わったので、とりあえず設定だけでも書いてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9557x/>

SHUFFLE! ~ 帰って来た少年 ~

2011年12月2日14時48分発行